

国立国語研究所学術情報リポジトリ

漢語形容動詞・副詞の品詞性と用法変化： 通時的観点からみた近現代の特徴

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鳴海, 伸一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002748

漢語形容動詞・副詞の品詞性と用法変化 —通時的観点からみた近現代の特徴—

鳴海 伸一

1. はじめに

漢語は、日本語の中で様々な品詞で使われる。それらの用法の中には、通時的に変化してきたものも少なからずある。特に、形容動詞・副詞として使用される漢語には、他品詞から転成したものや、用法に変化のあるものが多い。

そして、通時的な変化は、全く個々別々に変化するのではなく、変化に一定のまとまつた方向性があると考えられる。また、時代によって、変化の方向性やその傾向に特徴がある可能性も考えられる。

そこで本稿では、漢語の形容動詞・副詞をとりあげ、通時的な出現と継承の動向を捉え、どのように新語・新用法が発生し、変化してきたかを考察する。その上で、近現代に起こっている変化の具体例を示し、それらが歴史的な変化のあり方の中でどのように位置づけられるかを考察する。

まず2節では漢語の受容史とその中の形容動詞・副詞の位置付けを概観する。続く3節では現代語における漢語形容動詞・副詞の用法を、品詞性に着目して論じる。それを踏まえ4節では、副詞を中心に形容動詞的用法との関わりも視野に入れながら、通時的な変化の方向性を考察する。4-1では、通時的観点から漢語単独の副詞用法の位置付けを論じ、4-2・4-3ではそれぞれ「程度副詞化」「注釈副詞化」した副詞をとりあげ、漢語単独用法の発生に注目して、近現代の位置付けを考察する。

2. 漢語の受容と形容動詞・副詞

中国大陸で使用され、漢字表記される語である漢語は、古くから日本語の中に大量に受け入れられ、日本語の語彙・文法体系の中に広く浸透していった。さらに、それとともに、それぞれの漢語の意味・用法もさまざまに変化・変遷を経てきた。本節では、漢語が日本語の中に受け入れられ、用法を広げたり変化させたりしていくことと、そうした中での、形容動詞・副詞の特徴を述べる。

漢語を受容するということは、日本語の中に、別の言語体系である中国語の語彙を受け入れるということである。しかも、長年月にわたって、大量にかつ体系的に受け入れてきている。そこには、日本語内への漢語の体系的な浸透の過程があり、また一方では、和語にはない漢語特有の性格・性質を利用した語彙の再生産の過程があるともいえる。また、発音の面からみても、中国語の発音と全く同じ発音を日本語の音韻・音声体系の中ですることはできないので、受け入れ側の日本語の体系に合わせて、それに近い音で代用したり、音を挿入・削除するなどして規則的な改変を加えて使用することになる。また、外来の思

想・概念をそのままの意味で使用することはできなくても、日本人にも、あるいは日本語の中でも理解できるような意味に近づけて受け入れるということも起こる。あるいは、一旦外来の思想をそのまままたはそれに近い形で受け入れたあとで、より日本語の中で使いやすい意味に変えて使用していくということもおこると考えられる。

さて、そもそも漢語はどのような用法で受容されはじめたのだろうか。漢語受容に際しては、もっとも取り入れやすいものは体言的なものであろう。そのような概念・思想を表す体言的なものをいわば生の外来語として受け入れたのが初めであると考えられる。しかし、漢語というものに馴染み、漢語の受容・使用に習熟していくと、日本語の体系に合わせて動詞・形容動詞などの用言的な使用ができるような仕組みを作りだすということがおこる。また、従来からあった和語と混ざって新たな語を作り出すということも行なわれるようになる。

ここまで述べてきたような、漢語の受容について、「漢語の国語化（日本語化）」という用語で説明されることが従来からある。大きく言えば、漢語を日本語の中に取り入れ、それらが日本語の語彙・音韻体系の中に馴染み、同化することや、馴染み同化していく過程をさすものと考えられる。このように漢語が用法を拡大していく点は、趙英姫（2002）が「和語語基より文のいろんな成分に自由に転成できる漢語語基の性質」と述べるように、漢語に特有の特徴と考えられる。

その中で、形容動詞として使用されるものというのは、漢語に「なり」「たり」を付して、ナリ・タリ活用形容動詞とするものである。副詞として使用されるものというのは、漢語に「に」「と」などを付した形のものや、何もつかず漢語単独で副詞とするものである。「に」「と」を付して副詞として使用される漢語副詞は、それらがナリ・タリ活用形容動詞の連用形と同形であることから、漢語形容動詞と関連させて考える必要があるといえる。

しかし、「に」等のつかない、漢語単独の形で副詞用法を持つものは、形容動詞のように接辞を付して規則的に語形を作り出せるものとは若干異質である。確かに、形容動詞連用形語尾の「に」を付して「漢語+に」の形にしたものは連用修飾用法を持つ。したがって、漢語ナリ・タリ活用形容動詞として使用されるものは、理論上は、「漢語+に」の連用修飾用法をもつことになる。しかしその場合でも、のちに「に」が取れて漢語単独で副詞用法を獲得するに至るものや、「に」の付いた形のままでありながら、漢語の原義から離れて一語の副詞として発展する場合がある。そのようなものは、「漢語+に」という形で一語の副詞としてより熟したものになっていると考えられる。

なお、そのような副詞用法に注目して述べたものに、前田富祺（1983）がある。前田は「漢語副詞は漢語の国語化の現象の一つとして考えられる」とし、時代ごとに漢語副詞を例挙している。しかしこれは、網羅的かつ大局的な研究であり、それぞれの漢語の用法変化と、その時代ごとの傾向などの点で、さらなる考察の余地がある。そこで、4節で漢語単独用法の発生に注目して通時的な考察を行うために、次の3節では、現代語をもとに漢語形容動詞・副詞の用法を、整理する。

3. 現代日本語における漢語形容動詞・副詞

本節では、現代日本語における漢語形容動詞・副詞の代表的な語例を挙げ、どのような用法を持っているか、その品詞性を整理する。

3-1. 漢語形容動詞・副詞の種類

現代日本語の漢語には、形容動詞や副詞として使用されるものがある。以下のようなものがその例として挙げられる^{注1}。

- ・形容動詞…安全、意外、快適、確実、格好、可能、完全、簡単、共通、強力、綺麗、
経済、元気、健康、豪華、高級、最高、最適、残念、自由、主要、重要、
詳細、上手、新鮮、心配、正確、大事、大切、同様、独自、特殊、抜群、
反対、非常、必要、不安、不思議、不足、不要、便利、豊富、満足、
無理、有限、有効、有名
- ・副詞 …以上、一番、一切、一体、一杯、結局、事実、自体、実際、少々、絶対、
是非、全然、全体、丁度、直接、通常、徹底、突然、不断、普段、本来
- ・形容動詞／副詞両用法を持つもの

…結構、自然、十分、相当、大丈夫、大変、当然、特別、普通、本当
形容動詞は、「意外な」「同様の」「快適なる」「格好たる」のように、「な」「の」や「なる」「たる」を付して連体修飾用法となったり、「重要だ」「新鮮だ」のように、「だ」を付して述語用法となったり、「確実に」「元気で」のように、「に」「で」を付して連用修飾用法となるものである。それぞれの用法を複数併せ持つ語もある。

副詞は、「全然」「突然」のように漢語単独で、または「絶対に」「自然と」のように、「に」「と」を付して連用修飾用法となるものである。「突然（に）」「絶対（に）」のようなものは、漢語単独でも、「に」を付した形でも使用されるものである。そのほか、「少々は」「当然にも」「突然ながら」のように、「は」「にも」「ながら」を付す用法を持つものもある。また、これらの中には、「一切の」「通常の」のように、「の」を付して連体修飾用法となったり、「事実だ」「普通です」のように、「だ」「です」を付して述語用法となるものもある。そしてこれらの用法を複数併せ持つものもある。

3-2. 品詞性の考察

こういった、漢語の形容動詞・副詞には、その文法的性質、特に品詞性に関する先行研究がある。それらには、形容動詞・副詞を含めたさまざまな品詞で使用されている漢語というものが、日本語の中でどのように位置づけられるかということを論じたものや、漢語の品詞性に関わる事象を取り上げ通時的な変化を論じたもの、漢語の用法に関わる事象を取り上げて共時的な視点から諸種の資料・文献を用いて使用傾向をまとめたものや、意味・用法の違いを論じたもの、また、日本語教育の観点から、学習者の誤用例を取り上げるなどして日本語における漢語の用法・品詞性を論じたもの、などがある。

それらを踏まえて、以下では、形容動詞、副詞のそれぞれの品詞性を考察する。まず、形容動詞、副詞が、どのような形態で使用されるかということを分類し、それぞれの用法の特徴、用法間の共通点・相違点を考察するという形をとる。

形容動詞の用法は、漢語形容動詞語幹の後に、「な」「の」「だ」「に」といったどのような形式が付くかということによって、次のように、①連体修飾用法・②述語用法・③連用修飾用法の3種類に分けられる。

- ①「な」「の」を付して連体修飾用法となる
- ②「だ」を付して述語用法となる
- ③「に」を付して連用修飾用法となる

それぞれの用法には、どのような語例があるか。前項に挙げたものから例示すると、以下のようになる。

- ① 安全、意外、快適、確実、格好、可能、完全、簡単、共通、強力、綺麗、結構、元気、健康、豪華、高級、最高、最適、残念、自然、自由、主要、十分、重要、詳細、上手、新鮮、心配、正確、相当、大事、大丈夫、大切、大変、当然、同様、独自、特殊、特別、抜群、反対、必要、不安、不思議、不足、普通、不要、便利、豊富、本当、満足、無理、有限、有効、有名
- ② 安全、意外、快適、確実、格好、可能、完全、簡単、綺麗、共通、強力、結構、元気、健康、豪華、高級、最高、最適、残念、自然、自由、主要、十分、重要、詳細、上手、新鮮、心配、正確、相当、大事、大丈夫、大切、大変、当然、同様、独自、特殊、特別、抜群、反対、必要、不安、不思議、不足、普通、不要、便利、豊富、本当、満足、無理、有効、有限、有名
- ③ 安全、意外、快適、確実、完全、簡単、綺麗、共通、強力、経済、結構、元気、健康、豪華、最高、最適、自然、自由、十分、詳細、上手、正確、相当、大事、大切、大変、当然、同様、独自、特別、抜群、反対、非常、不思議、普通、豊富、本当、満足、無理、有効

このうち、①に分類したものについては、さらに、「な」「の」のいずれが付くかによって分けることが可能であるように思われる。つまり、①の語すべてに、「な」「の」の両方が付きうるわけではないのである。例えば、「意外」「重要」などは現代共通語においては通常「な」は付くが「の」は付かない。「同様」「詳細」などは「な」「の」いずれも付く。「不足」は「の」は付くのに対して、「な」は不可能ではないまでも不自然である。「な／の」選択については田野村忠温（2002）やスワン彰子（1994）などの研究もある。「な」が付くか「の」が付くか、「な」「の」両方が付くかということには、それらが指摘するような、両者の意味上の違いの他に、時代差、文体差、位相差、といったものがあり得ると考えられる。さらに「な／の」選択の判定には個人差もあるであろう。しかし、ここで挙げたような、基本的な漢語においては、「な」の付くものが大勢を占めるといってよいであろう。

①の連体修飾用法を持つものの中には、「重要 - (事項／案件／書類／性)」「自由 - (主義／貿易／行動／型)」といったように、合成語を作る前要素・語基として使用される形式となるものも多く存在する。こういった場合も、後接する他の語基や接辞に対して連体修飾的に機能しているといえる。さらに、「健康的 (な)」「共通的 (な)」といったように、「的」を付した形でも連体修飾用法となるものがある。

また、①の連体修飾用法と②の述語用法を持つものが漢語形容動詞の大半を占める。①②の用法を持つことが、漢語形容動詞にとって最も基本的な性質といえる。それに比べると、③の用法を持つものはやや少なくなる。③の用法を持たないものは、次に挙げようなものである。

重要、新鮮、残念、可能、主要、特殊、必要、不安、不足、不要、便利、有限、有名、心配、高級、格好

これらは、①・②の用法を持つが、③の連用修飾用法を持たないものである。

なお、「非常」は「非常事態」などといった合成語を作る表現を除くと、「非常に」という形の程度副詞としての連用修飾用法が主であり、①連体修飾用法や②述語用法は一般的には持たないと思われる。「非常な努力」などといった表現が皆無ではないにしても、使用頻度という点で落ちると思われる。「経済」に関しても、①②の用法にあたる「経済な」「経済の」「経済だ」といった表現は、「経済的」に比べ、現代共通語ではあまり使われないものと思われる。こういった問題は、前述したように、時代差、文体差、位相差、個人差といったものがあり得ると考えられる。

また、形容動詞用法をもつ漢語には、名詞としての用法を兼ね有するものがある。例えば、「安全が最も大事」「健康を目指す」「自由が欲しい」などのようなものである。このような名詞的な使用について、村木新次郎(2004)は、名詞的に使用されるような漢語には、表現上一定の制限があるとし、ある属性に対する、精神的な活動・言語活動・態度・程度に関わる動詞と結びつく場合に限られるとする。また、名詞の他に、形容動詞用法を持つ漢語には、「金額が不足する」「性質が共通する」「待遇に満足する」といったように、「する」を付した動詞としての用法を兼ね有するものもある。このように、同一の語が、複数の品詞にまたがって使用される事例が多いというのは、村木の指摘するように、漢語の持つ特徴といえる。

次に、副詞の用法には次のようなものがあると考えられる。どういった形式が後接するか、あるいは何も後接しないかによって4つに分類したが、いずれも連用修飾用法である。

- ① 漢語単独のもの
- ② 「に」を付すもの
- ③ 「と」を付すもの
- ④ 「は」「にも」「ながら」を付すもの

それぞれの語例には、どのようなものがあるか。ここでも、前項に挙げたものから例示すると、以下のようなものが挙げられる。

- ① 一番、一切、一体、一杯、結局、結構、事実、自然、実際、十分、少々、是非、絶対、全然、全体、相当、大変、丁度、直接、通常、当然、特別、突然、普段、普通、本当、本来
- ② 一杯、自然、実際、十分、是非、絶対、相当、大変、直接、当然、特別、突然、不断、普通、本当
- ③ 自然
- ④ 結局、実際、十分、少々、是非、通常、直接、当然、特別、突然、普段、普通、本当、本来

これらを見ると、①の漢語単独で連用修飾用法となるものが最も多い。②③④のように、「に」などの付くものよりも、漢語単独のものが、基本的な漢語に多いということがわかる。

「と」の付くものは「自然」のみであったが、「自然」は単独でも、「に」の付いた形でも使用され、意味・用法が必ずしも全同ではない。例えば、「怪我が自然に治る」「大人になれば自然とわかる」などの、「に」や「と」の付いたものは、〈ひとりでに、ほうっておいても〉といった意味であるが、それに対して、「証拠を突き合わせると、自然彼が犯人だとわかる」のように漢語単独で連用修飾用法で使用された場合には、〈当然のなりゆきとして〉といった意味になる。

このように、副詞の場合、「に」などの助詞が付くかどうか、あるいは何が付くかによって、意味・用法が異なるという場合がある。一般的に言って、漢語単独でも使用されるものは、より副詞として熟したものとことができ、それらに「に」の付いたものは、その漢語のもともとの意味を残している、と考えられる。また、それに関連して、永澤済(2011)は、副詞の文法的・意味的変化について、同様の変化は和語や他言語にもみられるものであるが、漢語副詞に特徴的なのは、漢字の字義通りの意味から離れる方向に変化する点であり、そのことは、漢語が漢字という基盤への依存度を弱め、日本語の中に溶け込んだことの現れと見ることができるとする。

また、これらの漢語副詞の中には、「の」を付して連体修飾用法となるものがある。次に挙げるようなものである。

突然、少々、以上、一切、通常、実際、絶対、直接、本来、一杯、不断、普段、一番、特別、十分、相当、当然、普通、本当

さらに、「だ」「です」を付して述語用法となるものもある。次に挙げるようなものである。

全然、突然、少々、丁度、事実、絶対、本来、一杯、一番、特別、十分、相当、当然、普通、結構、本当、自然

ただし、そのような連体修飾用法や述語用法で使用されることはあっても、そのような場合に、もとの副詞とは多かれ少なかれ意味が異なる場合がある。連体修飾用法や述語用法となるということは、それだけ形容動詞的性質に近付いているともいえ、また、それぞれの用法の有無の判定には個人差があると思われる。

4. 漢語副詞の用法

4-1. 単独用法発生についての一考察

前節で述べたように、漢語副詞の中には、「に」「と」などの助辞の付いた形で用いられるものが少なからずある。それらをそれぞれ「ニ型」「ト型」とし、そういった助辞の付かない漢語单独で用いられるものを「φ型」とする。すると、これまでの調査で、φ型とニ型の用法を併有するパターンが、その中でも最も多いようであるということが分かっている。さらに、その「に」「と」などのつく漢語副詞や副詞一般に関する歴史的変遷のパターンが、いくつか先行研究で提示されている。そこで本節では、漢語が单独で使用されているか、「に」「と」などが付いた形で使用されているか、といった観点から、通時的に変遷を見、先行研究における指摘等を検証しながら、その歴史的な消長を捉える。

漢語副詞の大まかな変遷、通時的傾向を述べる前田富祺（1983）には、次のようにある。

漢語が单独で副詞として用いられているものと、いわゆる混種語として副詞の役割を果たしているものとを対比すると、漢語が单独で使われているものが基本でそれに何かが加わって混種語となったと見たくなるが、漢語副詞の歴史から見るとむしろ逆に考えるべきである。特に、助詞の「に」のついた漢語副詞はもっとも基本的なものと考えられ、この「に」が落ちることによって、漢語副詞としてはもっとも副詞的である单独で副詞として用いられる形になったと考えた方が良いように思うのである。

また、副詞一般について「に」のつく副詞と「と」のつく副詞の用法を分類・整理し、通時的变化についても言及のある小林幸江（1978）においては、「X自体に既に連用修飾機能の備わっている」ために「連用助詞 α 〔に、と〕の不要なもの」を「[X]型」、「 α の添加により、はじめて連用修飾機能を有するもの」を「[X[’] α]型」、「X自体に既に連用修飾機能が備わっているが、 α が添加される場合もあるもの」を「[X α]型」とした上で、 $[X^{'}\alpha \rightarrow X\alpha \rightarrow X]$ という通時的变化のモデルを示し、さらに、「[X α]型の副詞は歴史的変遷の過渡期にある形態を示すものと言えよう」としている。

両者の見方を総合すると、もともと「に」「と」などの付いたものが副詞として基本的なものであって、それが歴史上のある時期に、「に」「と」などの付かない形でも使用され始め、両者が併用される過渡期を経た上で、完全に「に」「と」などの脱落した单独での用法になる、といった通時的变化をたどることになる。おそらくこのような見方が一般的なものであろうし、また、妥当性のある見解のようにも思われるが、果たして漢語副詞についてもこのような理解があてはまるか、漢語副詞についてもそのような変遷が見てとれるかということを、漢語副詞が発生、定着したとされる鎌倉時代から、江戸時代にかけての資料を対象に、調査することとする。調査対象は、φ型での使用が見られるものとする。その時代の資料に無くとも、後にφ型の用例が見られるもの、現代ではφ型で使用されるものを含める。また、ニ型でも、漢語の原義から完全に離れ、「に」が付くことによって日本で独自に副詞として使用されていると思われるものは、単独用法が無くても参考のために掲げてある。

調査結果^{注2}は、以下のように表せる。「その他」に挙げたものの（ ）内には、漢語の前にどのような形の付くものが見られたかを示している。

《鎌倉時代に例の見えるもの》

ϕ型…一向、一切、一旦、一定、向後、結句、自今以後、始終、所詮、少々、真実、
隨分、善惡、大抵、大略、都合、天性、内々

ニ型…一々、一々次第、一所、散々、次第、自然、遂、無下

《上の他、室町時代に例の見えるもの》

ϕ型…一、一倍、永々、永代、涯分、格別、元来、結局、堅固、再々、再三、至極、
悉皆、生得、済々、節々、善惡、總別、第一、多分、年中、莫大、抜群、万々、
必定、平生、勿論

ニ型…有無、散々、種々、切、沢山、逐一、頓、不斷、別、本、微塵、無体

ϕ型・ニ型…最前、時々刻々、次第次第、連々

その他…一段（ϕ型・ト型）、極（ト型）、自然（ϕ型・ニ型・トシテ）、
真実（ϕ型・ニ型・カラ）、是非（ϕ型・ニ型・トモ）

《上の他、江戸時代に例の見えるもの》

ϕ型…古来、十分、常住、折角、大概、地体、畢竟、万一、密々

ニ型…急、大分、無性、無理矢理

その他…自然（ϕ型・ト型）、神（ゾ）、真実（ϕ型・ニ型・カラ）、
隨分（ϕ型・ト型）、是非（ϕ型・ニ型・ナク・トモニ）、
段々（ϕ型・ニ型・ト型）、微塵（ϕ型・ニ型・モ）、樂々（ト型）

鎌倉時代のものは、ϕ型のみのものとニ型のみのものしかない。そして全てが、後代へと継承されている。なお、これ以前の平安時代に関しては、宮田裕行（1976）が、平安時代の和文を資料として、漢語を構成要素にもつ語彙について、漢語副詞も含めて調査している。そこで副詞として挙げられているのは、以下のものである。

A 漢語十に

一向に、一心に、懸隔に、現に、自然に、隨分に、不意に、不斷に、別に

B 漢語十と

掲焉と

C 漢語の疊語

少々、忽忽に、朦朧に

D 漢語十して

総じて

これによると、鎌倉時代にϕ型化して使用されている「一向」「隨分」「不斷」は、平安時代にはニ型として使用されていたということになる。しかし、それらの例というものは、以下に示すように、漢語の原義が残ったものであって、いまだ「漢語十に」という感じの抜けきらないものである。

1 一向に仕うまつるべうなむ、心ざしを励まして (源氏物語、玉鬘)

2 「たゞ、うはべばかりの情に、手、はしり書き、をりふしのいらへ、心えて、うちしなどばかりは、随分によろしきも多かり」と見給ふれど、(源氏物語、簫木)

3 忠こその阿闍梨も、大願を立てて、聖天の法を不断に行ひ、(宇津保物語、菊の宴)

1 の例は〈ひたすらに、一つに向かう〉といった意味であり、2 の例は〈分相応 (な分量) に〉の意味であり、3 の例は、〈絶えず、常に〉といった意味である。つまり、「漢語の原義」 + 「〈そのような様子で〉」という意味である。仮にそのようなものを副詞として認めたとしても、そのような「ニ型」のものが全て ϕ 型化するわけではない。

室町時代に入ると、前代から ϕ 型のままで引き継ぐものが多いものの、新たに多彩な漢語副詞が現れる。また、ここに至って、鎌倉時代には無かった、ϕ 型とニ型が併用されるものも現れるのだが、注目されるのは、鎌倉時代にニ型しかなかったものが、ϕ 型と併用されており、鎌倉時代に ϕ 型しかなかったものが、ニ型でも用いられていたりする点である。

例えば「一々」は、鎌倉時代にニ型しか無かったのが、室町時代に入ってニ型とともに ϕ 型も発生した例であるが、両者の間に明確な使い分けは見られない。「一向」「所詮」は反対に、鎌倉時代に「ϕ 型」しかなかったものが、ニ型でも使われている例である。「一向」の場合は、先述の通り、平安時代にもニ型が見られ、そこで用法に近いものかとも思われるが、この語に関しては、さらに後の時代までも ϕ 型とニ型の拮抗が続く、やや特殊な例と考えられる（その詳細は菊池由紀子 1983、原卓志 1992 などで論じられている）。「所詮」のニ型は、次の二例のみであり、存在が疑わしいが、やはり、副詞に「に」が付くものが多いことの影響かとも考えられる。

4 所詮に、あまくだりたまふ七星をまつり、しやうかう殿に宝をつみ、一時にやきすべて、災難のうたがひをとゞむべし」と (曾我物語、卷二)

また、「一段」に至っては、ϕ 型とともにト型でも用いられている。

江戸時代に入ると、さらに多彩な漢語副詞が登場するとともに、「自然」「隨分」「段々」などにおいても、ϕ 型とともに、ト型の使用例が見られるようになっている。

このように見えてくると、必ずしも前田らの指摘するように、ニ型から「に」が落ちることによってもっとも副詞的となるとは言えない可能性がある。確かに「に」の付いた連用修飾用法のものを漢語副詞と認めた場合に、数の上ではそのようなものが多い段階から ϕ 型の比較的多くなる段階へという変化があるように見られる。しかし、個別の語の副詞用法の発生を見た場合には、かならずしもそのような過程を経ているものは多くない。むしろ、ϕ 型のみのものが比較的早い段階から見られる点が注目される。

この点に関して、山田孝雄（1940）には、漢語由来の副詞について、「元来外国語にても副詞たるもののが入り来たりしものにしてそれらは専ら時間、程度を示すものたり。而してこれが帰化語たる場合には国語にても副詞として用ひらる」とし、「元来 爾来 向後 一切 大抵 悉皆」の例を挙げる。

確かに、鎌倉時代に ϕ 型として用いられ、その後も比較的長い期間に渡って継承されるものには、時間を表すものが多い。漢語が副詞として使用されるようになり、なおかつ定着したのは、このことによるのではないか。尤も、その後の時代に新しく発生したものにも、同様に、時間を表すものは少なくないが、山田が挙げるもののほかにも、「昨夜」など「昨-」の形のもの、「数度」など「数-」の形のもの、その他、「先-」「毎-」「連-」「明-」など、時間や頻度を表す漢語は、「に」の付かない形で早い段階から見られる。

また、前述したように、平安時代から「ニ型」と思われる例は散見され、ニ型から ϕ 型が発生した、あるいは、全体としてニ型から ϕ 方へ、という流れがあるようみえるかもしれないが、そのような平安時代の「ニ型」が全て後に ϕ 型化するわけではなく、また反対に、鎌倉時代に既に ϕ 型で使用されていた副詞がいずれも、平安時代に「ニ型」で使用されていたという事実も無いようである。

今回得られた漢語副詞の中で、ニ型から「に」が取れて ϕ 型になったとみなせるものは、「一々」「散々」「自然」のみである。むしろ、鎌倉時代に ϕ 型の用例のみでありながら、後にニ型も併用されるなどの例が、見られるほどである。これらは、副詞に「に」の付くものが多いことから、前述した「所詮」の例のように、もともと単独でも用いられるものにまで「に」を付けて使用されていると考えられるのではないだろうか。

室町時代以降には、 ϕ 型化した後にさらに「と」を取る「自然」「随分」「段々」のようなものも見られ、これらの ϕ 型とニ型の間に、明確な使い分けの無いものも多い。

この「ト型」に関して、小林幸江（1978）には次のような指摘もある。

「と」のつく副詞に関しては次のような変遷のパターンが考えられる。

$[X' \rightarrow X \rightarrow X] \rightarrow X$ に

通時的変遷を経て、語的独立性を増してXとなった副詞は新たに「に」をも取りうるというパターンである。

小林（1978）は、何か具体的な調査資料やデータを示すものではないが、以上のようなパターンの例として「自然」「段々」を挙げている。しかし、「自然と」という形は室町時代以前には見られない。語的独立性を増した後に取りうるのは、今回の調査で見る限り、「に」ではなく「と」の方であり、ニ型の発生以前にト型の使用例の見られたものは無かった。

このように、通時的に漢語副詞を調査し、「に」の付いた、形容動詞と連続性のある用法と、単独用法との関わりを、個別の語の用法変化として捉えると、必ずしも「に」の付いたものが本来の形で、そこから「に」が落ちて使用されるようになるといったパターンを、基本的なものとは考えられないことがわかる。一般的に考えられているような、「ニ型」から語的独立性を増して「 ϕ 型」ができるといったものは例が少なく、また、 ϕ 型になる前の過渡期的段階といったものも認められない。むしろ、早い時期に、中国語の原義のまま時間を表す副詞として ϕ 型が発生することで、 ϕ 型の漢語副詞が展開していったのではなかろうか。そしてその後、語的独立性を増した後で「に」「と」などを取った形でも使用されるものが現れ、中には、それらの間で用法に違いのあるものもある、ということになる。

用例を収集した資料の量は十分とは言えず、個別の語の調査をした場合にはまた違った結果が出る可能性も否定できないが、少なくとも漢語副詞の発生・展開を考える場合、近世までの範囲では、以上のような見方ができると考える。実際、前田（1983）でも、 ϕ 型化するのは、近代以降に多いという指摘がある。意味の変化、抽象化をあまり経ずに、漢語の原義そのままの意味をある程度保ちつつ、単純に「に」が取れた形で使われる「事実」「實際」「無事」「誠心誠意」などは、いずれも近代以降の例であり、今回の範囲である近世以前には「一々」など極少数あるのみである^{注3}。

5 自來無事悠々の間に平和なる歳月を送ればなり。 (泉鏡花「愛と婚姻」)

6 徳島大尉は弘前の第三十一聯隊門間少佐あて、三本木に無事到着したことと、松尾伍長のことを打電した。 (新田次郎「八甲田山死の彷徨」)

7 もし真に日本を愛するのがその論拠であるならば、愛する日本のあらゆる必要に応えて、誠心誠意動くことこそ本来の道ではなかろうか。

(宮本百合子「私たちの建設」)

8 できるだけ誠心誠意御説明申し上げながら、この解決の最も基本にある原点はま
ず資源の開発であるというところであったわけですが、 (国会会議録、1977)

これらは、「無事」「誠心誠意」が「に」や「で」などの付かない単独の形で使用されたものである。

また、現代共通語において「と」の付いた形で使用されるものの中には、かつてはそのような形では使用されていなかったものもある。例えば、以下のような「意外（と）」「不思議（と）」が挙げられる。

9 ドラマのリハーサルというのは主役でなければ意外とヒマで、私は自分の出番で
ない時は、まわりの女優さんや男優さんを観察しているのが好きでした。

(うつみ宮土理「うつみ宮土理のカチンカチン体操」)

10 この実験もまた、サイモンの話と同じように、まったくナンセンスな途方もない
お話をつくるのは意外と大変だということを示しています。

(ボイズ著、野口廣訳「シャボン玉の科学」)

11 今度徳富先生の御依頼で訳してみました。私の訳文は我ながら不思議とソノ何ん
だが、これでも原文はきわめておもしろいです。 (二葉亭四迷「あひびき」)

12 あなたがお話しになるそのお祭り騒ぎ、行き過ぎという趣味は、不思議と外見か
らはとても地味なものに見えますね。

(フランソワーズ・サガン著、朝吹由紀子訳「愛と同じくらい孤独」)

9・10の「意外」は、「意外だ」「意外なこと」などのように形容動詞用法で使用されていたものであるが、このように、「と」と付した形で副詞的に使用される例が、現代では見られる^{注4}。11・12の「不思議」も、平安初期から用例の見られるものであるが、「と」の付いた副詞用法が見られるようになるのは、ここであげたように明治になってからのことである。

このように、「に」だけでなく「と」も、もともと付かなかつたものに、あとから付くようになるということがおこるのであり、「と」の付くものが基本的な形とは限らないといえる。また、さらにその後、比較的最近の例であるが、「永遠」に「と」を付して副詞的に使用する例が見られる。

13 俺りえとこうして一緒に飯食ってるだけで本当に幸せやわなどと、こんなことを
永遠と話してたカッポーたちがいましたが・・・ (Yahoo!ブログ、2008)

14 アニメやゲームの話を永遠とされるのはイヤです！ (Yahoo!知恵袋、2005)

〈延々と、いつまでも〉といった意味で使用されたものである。これは「延々 (と)」の副詞用法をもとにして発生したものと考えられる。音が近い「延々」から別の漢語である「永遠」に引かれ、〈永遠〉と思われるほど〈いつ終わるとも知れず長い時間続く〉さまに使用されたものであろう。ただし、この例の場合は「と」の付かない漢語単独の形では使用されないことから、やや特殊な例といえる。

このように、近代以降に、急激な漢語の増加と共に、漢語副詞にも新たに大きな ϕ 型化の傾向があったのであり、そこに至って、二型・ト型から単純に「に」「と」の取れたものと考えられる ϕ 型の用例が急増するものと考えられる。前述した通り、漢語副詞がそもそも発生・展開していく段階では、二型・ト型から ϕ 型へという流れではなく、むしろ「 ϕ 型」が最も基本的なものであるとも考えられる。

次項からは、程度副詞・注釈副詞という、副詞の意味のまとめについて、後接する形式の種類と有無に着目して通時的变化を考察し、近現代に特徴的な事象を考えていく。

4-2. 程度副詞化に関する一考察

副詞化のパターンの一つとして、程度副詞化ということが挙げられる。そしてそれは当然、漢語副詞についてもあてはまる。先述の山田孝雄の指摘においても、時間を表すものと並んで、程度を表すものが、漢語由来の副詞の一つの代表とされていた。そこで、本項では、今回得られた中世から近世までの漢語程度副詞の、歴史的変遷や特徴を探る。

今回得られた程度副詞は、以下のものである。

《鎌倉時代》

少々、真実、随分、無下 (に)

《室町時代》

前代に用例の認められたもの…少々、真実、随分、無下 (に)

前代に用例の認められないもの…一、一段 (ϕ ・と)、一倍、格別、第一、沢山 (に)、
莫大、万々、本 (に)

《江戸時代》

前代までに用例の認められたもの…一倍、格別、少々、真実、随分、第一、万々、
本 (に)、沢山 (に)、無下 (に)

前代までに用例の認められないもの…至極、大分、十分

鎌倉時代の程度副詞は、「少々」「真実」「随分」「無下（に）」の四語のみである。漢語副詞全体の数も少ないが、それにしてもあまり多くはない。漢語副詞の発生初期としては、程度副詞は、基本的なものではなかったと言える。

しかも、「少々」は、漢語の原義通りの程度副詞ではあるものの、程度の低いことを表すものである。「随分」も高度を表すものとは言えない。「真実」も漢語本来の意味を残して〈本当に〉といった程度のものである。「無下（に）」はこの中では高度を示すものであるが、『大漢和辞典』には漢籍の用例が示されておらず、和製漢語の疑いもある。その上「ニ型」であるため、鎌倉時代は、 ϕ 型で高度を示す漢語程度副詞は無いようである。但し中でも、「随分」「真実」については、鎌倉時代に ϕ 型と思われる例が見られる点については注意すべきである^{注5}。

室町時代に入ると、鎌倉時代の四語を受け継ぎつつも、一気に多くの漢語程度副詞が出現する。しかし、「一」「第一」「莫大」の三語は、次に挙げるような、キリストン資料のみに用例の見られるものであり、後代に引き継がれているのは、現代でも使用される「至極」のみである。

15 七つのサカラメントを工み作らせられたこと、何よりも一勝れた御所作でござつた。
(コリヤード懺悔録)

16 かへつてそれをよろこび、なんぢは／人中にて第一よはくをとりたるものとおもひとるべし
(こんてむつすむん地、卷第三、第十八)

17 ぶるがたうりよにて／とがをくりをなさんよりも、げんぜにてほうぜん事はばく
たいまされり
(こんてむつすむん地、卷第一、第二十二)

ここでは、高度の程度を表す副詞が登場してきたことが注目される。また、「一」「一段」「一倍」「第一」と「一」を含んだ漢語が多いことも興味深い。しかし、いずれも後代まで残り定着しているとは言い難い。むしろ鎌倉時代の「随分」「真実」などが現代でも使用されることを考えると、室町時代は、さまざまな漢語程度副詞が使用されていながら、後の時代へと定着させているとは言い難い。あるいは、それは程度表現の持つ性格であるのかも知れない。その時代時代で、より新鮮な響きのある程度表現を求めた結果とも考えられる。そのことは、いずれも高度の程度表現であることからも裏付けられるだろう。前代からある「随分」「真実」などは高度の程度（のみ）を示すものとは必ずしも言えない。

そして江戸時代に入ると、新たに「至極」「大分」「十分」が現れるが、これらは現代にまで引き継がれている点が指摘できる。結局、鎌倉時代に用例のあった「少々」「随分」「真実」「無下に」が江戸時代まで引き継がれ、その後は、さまざまな程度副詞が現れては消えて行くという様子となっている。

しかし、ニ型であったのは、『大漢和辞典』に漢籍の用例が載っておらず和製漢語の疑いのある「沢山」「無下」と一字漢語である「本」のみであり、それ以外は、すべて ϕ 型の用例である。しかも興味深いことに、『大漢和辞典』による限り、漢籍に同様の程度副詞的用法の確認できるものは一つも無かった。このことから、程度副詞は、みな日本で独自に用

法を変化させてできたものということになる。その際、「随分」「真実」に見られるように、「 ϕ 型」の用法で使用することによって、あるいはそれに伴って、意味変化を生じたと考えられる。

「大変 (に)」「十分 (に)」などが、現代語のように「に」の付いた形でも付かない形でも程度副詞として用いられるようになったのは、以下に挙げるように、近代以降のことである。

- 18 斯ういう風に実例を眼前に見て、苦しいとか、楽しいとか云う事は、人によって
大変違う。 (二葉亭四迷「予が半生の懺悔」)
- 19 此男はいくら酔つても、中／＼平生を離れない事がある。かと思ふと、大変に元
気づいて、調子に一種の悦楽を帶びて来る。 (夏目漱石「それから」)
- 20 此地へ来るまでは、僕は十分信じてをつた、お前さんに限つてそんな了簡のある
べき筈は無いと。 (尾崎紅葉「金色夜叉」)
- 21 女子も立たねばならぬ、意志の力を十分に養わねばならぬとはかれの持論である。
(田山花袋「蒲団」)

このように、単独で程度副詞化したあとに「に」を付けることが可能になったものが多く、「に」の付いた形で程度副詞化したものが、そのまま「に」が脱落して ϕ 型となったものは、少なくとも近世中期までの資料には見当たらない。

しかし時代が下って現代には、それまで「に」のついた形で程度副詞として使用されていたものが、「に」の付かない形で使用されるようになるものが出てくる。

- 22 サイコー面白い！！ (Yahoo! 映画 より
<http://info.movies.yahoo.co.jp/userreview/tyem/id343809/rid28/p0/s0/c0/>)
- 23 はじめてたべたんですがごぼうチップスサイコーうまいっすね!!
(Yahoo! 知恵袋 より
http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q13110573698)

これらは「最高」の例である。〈最高に、とても〉といった意味で使用されており、「に」の付かない形で「面白い」「うまい」といった形容詞を修飾する程度副詞となっている。また、次のような例もある。

- 24 こんなのがってない。カンペキおかしい。
(メグ・キャボット著、代田亜香子・金原瑞人訳「プリンセス・ダイアリー」)
- 25 「負けてるよなあ、カンペキ、負けてるって」 (重松清「口笛吹いて」)

これらは「完璧」の例である。〈完全に、疑う余地なく〉といった意味で使用されており、これも「に」の付かない形で「おかしい」「負けてる」を修飾している。

いずれの例も、漢字でなく仮名書きになっている点が注目できる。漢語としての原義を大きく離れているため、漢字表記すると意味にそぐわないという意識や、漢字表記された漢語に「に」などをはさまず直接に後の語をつなげると漢語単独で副詞用法であることが視覚的に分かりづらくなるという意識が働いた可能性を指摘できよう。

4-3. 注釈副詞化に関する一考察

近代における漢語副詞（漢語副用語）の通時的変遷を調査した趙英姫（2002）では、その一つの傾向として、近代語形成期から近代語完成期にかけて、以下のような注釈副詞が持続的に増えてきたという指摘がなされている。傍線を引いてあるのは完成期に新しく増えたものとされているものである。

案外、意外に、一般的に、元来、結局、事実、実は、所詮、当然、土台、普通（は）、本来、無論、勿論

そして、「全体的に見て注釈副詞は増えているし、両方に共通する注釈副詞の場合は述べ語数が増え使用頻度も高くなる傾向にある」としている。

しかし、具体的に数量的なデータを示しているわけではなく、また、挙げられているものを見てみると、その漢語副詞自体には、古くからあるものも含まれている。今回の調査の範囲からも、「元来」「結局」「所詮」「本来」「無論」といったものは、すでに中世までに用例が得られている。また、前述した、漢籍においてもともと副詞的用法を持つものは、日本においても比較的早くから「に」「と」などの付かない、漢語単独での用法が見られるということについては、注釈副詞に関しても、同様のことが言えると思われる。

そこで本項では、注釈副詞化という、用法の変化に主に着目して、趙の指摘する、漢語副詞における注釈副詞の増加の内実の一端を考察する。

趙（2002）では、注釈副詞の定義について、「渡辺実（1971）で定義されている誘導副詞から陳述副詞を除いたものに相当する」としている。ここではひとまず、特定の表現と呼応するものではなく、文全体にかかっていると思われるものを広く注釈副詞と認めることする。

今回の調査から、注釈副詞とみなせるものを通時的に並べると、次のようになる。

《鎌倉時代》

一旦、向後、結句、自今以後、始終、所詮、大抵、大略、天性

《室町時代》

前代に用例の認められたもの…一旦、向後、結句、始終、所詮、大略

前代に用例の認められないもの…元来、結局、生得、総別、第一、勿論

《江戸時代》

前代までに用例の認められたもの…一旦、元来、向後、結句、始終、所詮、生得、
総別、第一、大抵、勿論

前代までに用例の認められないもの…古来、地体、常住、折角、大概、畢竟

時間や回数、頻度などを表すものまで範囲を広くとっているが、少なくとも趙の言うところの注釈副詞が、用法としては、近代にまで下らなくとも、近世以前にこれだけ見られ、各時代にコンスタントに生み出されていることはわかる。

そこでここでは、そのなかでも用法に変化があったと思われるものを三例あげ、その注釈副詞化の様子を見ていくことにする。

【第一】

「第一」には、鎌倉時代には以下のような用例しかない。

26 誠に無双の磧徳、天下第一の高僧にておはしければ、君も臣もたッとみ、天王寺・六勝寺の別当をもかけ給へり。 (平家物語、卷二)

27 去る永萬には、第一の御子二条院崩御なりぬ。 (平家物語、卷六)

26 の例は、〈～の中では一番、～にかけては一番〉という意味のもの、27 の例は、単純な序数詞としてのものである。

ところが、室町時代に入って、キリスト教資料には、以下のような、程度副詞としての用例が現れる。

28 御主ご托胎の初めよりスピリツサント天降り給ふまでのミステリヨの内、第一すぐれたる理皆これにこもるもの也。 (ロザイロの観念)

29 又もろもろの人のうちに第一美しくまします御身を赤の裸になし奉り、面目なき御姿にて、 (ロザイロの観念)

30 ばんみんの中に第一あさましくふびんしごくなるわれ、 (こんてむつすむん地)

31 なんぢは人中にて第一よはくをとりたるものとおもひとるべし (こんてむつすむん地)

室町時代には、鎌倉時代までの用法をほぼ継承しつつ、これらのような、〈最も、一番〉といった意味の程度副詞的用法が、キリスト教資料において見られるようになる。

また、一方、「曾我物語」において、一例のみ、注釈副詞的用法と思われるものが見られる。〈なによりもまず、ほかのことはともかく〉といった意味と思われるのだが、同時期には他に例が無く、この用法がこの時期から広く使われていたとは考えられない。しかし、江戸時代に入ると、程度副詞用法とともに注釈副詞的用法が多く見られるようになる。

32 かれこれもつて、祐経にしられ、かへりてねらはれん事、うたがひなし。かゝる大事こそ候はね。第一、上へきこしめされては、死罪・流罪にもおこなはれ、身をいたづらにせんことの無念さよ。 (曾我物語、卷四)

33 いづれをひとつ、あしきと申べき所なし。情第一深し。 (好色一代男、卷五)

34 世間に鬼はなしと嬉しく耳をすまして聞に、「第一内かたは格氣ふかし。面屋の若い衆と物云事も嫌ひ給ふなり。 (好色一代女、卷四)

35 のぼりつめてはお客様にも女郎にもえて怪我のあるもの。第一勤の妨げと堰くはどこしも親方の習。それゆゑのお客の吟味。 (心中天の網島)

32 は先述の「曾我物語」の例、33 は「好色一代男」における程度副詞の例、そして 34・35 が、注釈副詞的用法の例である。前代までの用法を継承しつつ、この時代には 34・35 のような注釈副詞的用法がまとまって出現する。井原西鶴の作品において、33 のような程度副詞用法のものが数例見られるが、他資料には見られない。特定の表現と呼応せずに文全体にかかる注釈副詞としての用法は、この時期に確立されたものと思われる。但し、現代のようなマイナスよりのイメージを持つには至っていないようである。

【所詮】

「所詮」は、前述の通り鎌倉時代から副詞用法自体はあるが、中世末期から近世にかけての時期に、意味に変化が見られるものである。

鎌倉時代においては、以下のような例がある。

36 基盛、「御家名うけ給候畢。所詮宣旨によつて御上洛候か、院宣に随つてまいらせ給候か、承らん。」と申せば、
(保元物語、上)

37 中にも義朝を只一矢に射ころすべかりし物を、助をきたれば、今は親の敵に成ぬる事こそ悔けれ。所詮鎮西に下て、九国の者共催して、都へ責上り皇城を打傾けんに、義朝定而防かむずらん。
(保元物語、下)

この時期の所詮は、〈結局、つまり〉といった意味で「結果的に落ち着くところ」としての事態を単に述べる場面での使用である。

室町時代に入ると、以下のような例が現れる。

38 所詮、世のけいにまかせ、伊東二郎にたまはるべきか、また祐経にたまはるべきか、相伝の道理について、憲法の上裁をあふがんと欲す。
(曾我物語、卷一)

39 「所詮今は何に憚るべき、たゞ思ふ様に遊ばせ参らせよ」とて、泉冠者に申し付けて、
(義経記、卷七)

おおむね前代と同じと思われるが、39の例は、やや後代の要素が含まれているようにも解釈が可能である。

40 死は軽くして易し生は重くして難し。所詮命を全くして平氏の怨敵。右大将頼朝を一太刀恨み
(出世景清)

41 其の期にのぞんでは嘆きに沈みよもや討ち給ふまじ。所詮我等臆病者未練の体を見給はば。御憎しみの怒りの刃御心やすく討ち給はんと。
(嫗山姥)

この時期に至ると、前代までの単なる〈結局、つまり〉の意味だけではなく、その結果の事態に対する話者の評価・注釈の意味が濃く表れ、より注釈副詞性を増していると思われる。

【勿論】

「勿論」は、中山緑朗（1986）においては、「玉葉」「園太曆」の例を一例ずつ挙げ、古記録の方面では副詞として盛んに用いられていたとし、また本調査でも用例が得られたが、古記録以外の資料では、以下に挙げるよう、室町末期に至るまで、注釈副詞としての用法は見られない。

42 今度山門の御訴訟、理運の条勿論に候。御成敗遅々こそ、よそにても遺恨に覚候べ。
(平家物語、卷一)

43 学頭の仰せは勿論に候。
(義経記、卷三)

44 いかなる柔軟忍辱の阿闍梨なりとも、命を絶ちたきこと勿論なり。(猫のさうし)

室町に入る頃までは、いずれも形容動詞としての例しか見られない。

45 その時もちろん維盛も都を落ちられてあつたか？
(天草版平家物語、卷三)

46 流人御免とは尤もの善根然らば勿論俊寛僧都。丹波の少将成経平判官康頼。三人
共の御赦免であらうするとの給へば。 (平家女護嶋)

今回の調査では、天草版平家物語の例が、副詞用法としての初出であった。

このように、「第一」「所詮」「勿論」は、漢語単独の副詞用法で使用されるようになるとともに、注釈副詞としての用法が発生しているといえる。

趙（2002）では、近代に漢語の注釈副詞が増加した原因について、「数の少ない和語の注釈副詞を補う形で漢語の注釈副詞が増えてきたと考えられる」「近代漢語副用語において、数の少ない和語の注釈副詞を補う形で漢語の注釈副詞が増えてきたのは、和語語基より文のいろんな成分に自由に転成できる漢語語基の性質に由来すると考えられる」と指摘している。

和語の注釈副詞の種類や数について調査する必要があるが、漢語の副詞化の中でも、注釈副詞化という用法の変化について言えば、趙が近代以降のものとして述べるように、比較的遅くに起こったことであると考えられる。前項で見たように比較的早い時期から見られる程度副詞化に対して、注釈副詞化というのも、中世末期から近世前期にかけての一つの傾向として指摘できるのではないだろうか。そして、特に「第一」においては程度副詞化が起こった後で注釈副詞用法が一般化していることから、順序としては、注釈副詞化の方が後であると言えよう。

さて、現代では、漢語「結果」について、注釈副詞（文副詞）的用法の使用が見られるようになっている。次のようなものである^{注6}。

47 それが頓挫すると、政局第一に転換し、「解散・総選挙があるぞ」「あるぞ」と言
ってきたが、結果、総選挙は越年となった。 (Yahoo!ブログ、2008)

48 米については、長年過剰基調か継続しこれが在庫の、増嵩、米価の低下を引き起
こし、結果、水田農業の経営が困難な状況に立ち至っている一方、消費者ニーズが
多様化し、 (福島県大沼郡会津美里町「広報あいづみさと」)

47・48の例は、「結果」が単独で文副詞的に使用されたものである。従来からある、「その結果」「～した結果」などの形で、漢語「結果」の前に連体修飾部が付くものでなく、このように、単独で使用される点が新しい用法といえる。〈結果として、結局〉といった意味を表している。これは、「に」「と」などの付いた形で使用されていたわけではないので、元の形を想定すれば、「結果として」「結果的に」などが考えられる。もとから単独の副詞用法をもつ「結局」と形も意味も似ており、そこからの連想が働いたこともあわせて考慮する必要があろう。

5. おわりに

以上、本稿では、漢語受容史の中で形容動詞・副詞をとらえ、それらの品詞性を整理したうえで、特に漢語単独での副詞用法発生について、必ずしもニ型・ト型から「に」「と」が落ちるというパターンが基本的とは言えない可能性を示した。

用例を収集する資料を増やすことや、個別の語のそれより詳しい調査などは今後の課題としなければならないが、漢語副詞の発生・展開を考える場合、近世までの範囲での漢語単独用法のあり方と、それとの対比の上での近現代以降の特色について、その大筋を示すことができたと考える。

注 1 野村雅昭（1999）の「基本三千漢語一覧」などを参考にした。

注 2 調査は、以下の文献で行った。

『鎌倉時代』『保元物語』『平治物語』『平家物語』…日本古典文学大系（岩波書店）、『三長記』『平戸記』『順徳院御記』『後鳥羽天皇宸記』『吉続記』『勘仲記』『伏見天皇』『冬平公記』『後伏見天皇宸記』…増補史料大成（臨川書店）、『花園天皇宸記』…史料大成（臨川書店）
『室町時代』『御伽草子』…日本古典文学全集（小学館）、『曾我物語』『義経記』…日本古典文学大系（岩波書店）、『幸若舞』…笛野堅『幸若舞曲集』（第一書房、1943）、『ばうちづもの授けやう』『おらしよの翻訳』…林重雄『ばうちづもの授けやうおらしよの翻訳 本文及び総索引』（笠間書院、1981）、『天草版平家物語』…江口正弘『天草版平家物語 対照本文及び総索引』（明治書院、1986）、『エソポのハプラス』…大塚光信・来田隆『エソポのハプラス 本文と総索引』（清文堂、1999）、『ロザイロの観念』…小島幸枝『キリシタン版『スピリツアル修行』の研究』（笠間書院、1989）、『こんてむつすむん地』…近藤政美『こんてむつすむん地総索引』（笠間書院、1977）、『吉利支丹文学集』（日本古典全書、朝日新聞社）、『コリヤードさんげろく』…大塚光信『コリヤードさんげろく私注』（臨川書店、1985）、『虎明本狂言』…池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究』（表現社、1983）、『康富記』『碧山日録』『親長卿記』『宣胤卿記』…増補史料大成（臨川書店）、『斎藤基恒日記』『斎藤親基日記』『蔭涼軒日録』『大乗院寺社雜事記』『後法興院関白記』『多聞院日記』『家忠日記』…増補続史料大成（臨川書店）、『臥雲日件録抜尤』…大日本古記録（岩波書店）、『晴富宿禰記』…図書寮叢刊（明治書院）

『江戸時代』『西鶴集』『近松淨瑠璃集』…日本古典文学大系（岩波書店）、『時慶卿記』…『ビブリア』40・41)、『言緒卿記』…大日本史料、『本光国師日記』…大日本佛教全書、『忠利宿禰記』…改訂史籍集覽、『堯恕法親王日記』…妙法院史料、『唐通事会所日録』…大日本近世史料、『妙法院日次記』…続群書類從完成会

注 3 「事実」「実際」については、拙稿（2013）で述べた。

注 4 『日本国語大辞典』第二版の「意外」の項には、「現代では、俗に「意外と」の形で副詞的にも用いる。」とある。

注 5 「随分」については拙稿（2012）、「真実」については拙稿（2013）で、詳しい語史を述べた。また、「無下」についても、漢語由来であるかどうかといったことも含めて、拙稿（2008）で述べた。

注 6 「結果」のこうした用法についてはすでに指摘が複数ある。例えば、高橋圭子・東泉裕子（2013）では、新用法発生のプロセスが論じられている。

調査資料

例文の引用には、注2に挙げた文献の他、下記のデータベース・テキストを使用し、また、用例の検索・調査には、その他公刊されている索引も使用している。なお、表記は私に改めた場合がある。

データベース…「現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言」

テキスト…『日本古典文学大系』(岩波書店)、『明治文学全集』(筑摩書房)、『宮本百合子全集 第15巻』(新日本出版社)

参考文献

- 菊池由紀子 (1983) 「もっぱら」 (『講座日本語の語彙 10 語誌II』明治書院)
- 小林幸江 (1978) 「「に」のつく副詞、「と」のつく副詞」 (『日本語学校論集』6)
- スワン彰子 (1994) 「形容動詞+「な」/「の」について」 (『講座日本語教育』29)
- 高橋圭子・東泉裕子 (2013) 「漢語名詞の副詞用法 ~『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『太陽コーパス』を用いて~」 (第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集)
- 田野村忠温 (2002) 「形容動詞連体形における「なの」選択の一要因 一「有名な」と「無名の」一」 (『計量国語学』23-4)
- 趙英姫 (2002) 「近代漢語副用語の出現形態と使用場面との関連性」 (『早稲田日本語研究』10)
- 永澤済 (2011) 「文法的機能からみた漢語」 (『国文学 解釈と鑑賞』76-1)
- 中山緑朗 (1986) 「古記録の語彙に見る副詞 一漢語副詞の登場一」 (『学苑』561)
- 鳴海伸一 (2008) 「「むげ」の意味変化」 (『国語学研究』48)
- 鳴海伸一 (2012) 「程度的意味・評価的意味の発生 一漢語「随分」の受容と変容を例として一」 (『日本語の研究』8-1)
- 鳴海伸一 (2013) 「真実性をもとにした程度的意味の発生 一漢語「真実」とその類義語を例に一」 (『訓点語と訓点資料』131)
- 野村雅昭 (1999) 「語彙調査データによる基本漢語の抽出」 (『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』12)
- 原卓志 (1992) 「漢語「一向」をめぐる問題点—否定用法・使用者層について—」 (『古代語の構造と展開』和泉書院)
- 前田富祺 (1983) 「漢語副詞の種々相」 (渡辺実編『副用語の研究』明治書院)
- 宮田裕行 (1976) 「平安時代和文における漢語を構成要素にもつ語彙について」 (『東洋大学短期大学部紀要』7)
- 村木新次郎 (2004) 「漢語の品詞性を再考する」 (『同志社女子大学日本語日本文学』 16)
- 山田孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』 塙書房